

# 輸出可能な茶の生産安定

## 要約

・国内需要が低迷する一方、米国、台湾、EU、英国を中心に輸出が伸びている。そこで、輸出可能な茶の生産安定のため、海外の農薬残留基準値を超えない農薬の選択、使用方法を明らかにすること、および、同様に海外ニーズが高い有機栽培に関して、管内の先進農家の事例収集に取り組んだ。

## 現状(背景)と課題

- ・輸出先として台湾、米国、欧州があるが、現行の防除暦は台湾向けに対応しているがその他の輸出先には対応しておらず、薬剤選択資料がない。
- ・有機栽培茶は海外で需要が高く輸出にも適しているが、新たに開始する場合に役立つ情報が未整備。

## 目標

- ・欧米向け一番茶生産薬剤選択資料の作成
- ・有機栽培の事例情報の整備とその活用による生産面積の拡大

## 活動内容

- ・出荷先、防除体系が異なる生産者の一番茶の農薬残留分析値、防除履歴、各国の農薬残留基準値から、各農薬の一番茶前の使用可否、およびその使用方法を整理して茶生産者に情報提供した。
- ・有機栽培圃場の耕種概要、収量・品質、病害虫発生状況を調査した。結果は山添村茶生産組合総会で紹介した。

## 成果

- ・欧米向け一番茶生産薬剤選択資料の作成では、EU、米国および台湾のいずれの国向けでも一番茶前に使用可能な農薬や、米国や台湾向けには使用できるが欧州向けには使用できない農薬などに分け、それら薬剤について、摘採日を基準とした使用時期を資料に加え整理した。
- ・有機栽培茶の生産方法検証では、収量は慣行にやや劣るものの、一番茶と秋番茶の時期は病害虫被害が少なく慣行と同程度の品質であり、二番茶は害虫被害が多く品質が劣ること等がわかった。



病害虫調査



栽培・経営概要の聞き取り

## 普及活動のポイント

- 出荷先が異なり、防除回数が多い生産者を対象にすることにより短期間で効率よくデータ収集できるよう心がけた。
- 有機栽培生産者のうち、取り組み期間が長く経験豊富な生産者の園地を選ぶとともに、農薬、肥料、除草時間など慣行栽培と異なる部分を重点的にデータ収集して効率的に有機栽培の特徴を把握できるよう努めた。

## 対象の変化

- 欧米向け一番茶生産薬剤選択資料については、これまでの取り組みをまとめて奈良県茶生産青年協議会および山添村茶生産組合に情報提供した結果、生産者が出荷先を意識するようになった。また、一部の生産組合は薬剤選択の参考に活用されるようになった。
- 有機栽培茶の生産方法検証では、病害虫調査結果や調査結果を整理して意見交換を行い、栽培方式の違いによって病害虫の発生が異なることについて理解を深めることができた。

## 対象者からのコメント

- 今までどこに出荷されているか関心がなかったが、話を聞いて出荷先によって農薬を選択する必要性がわかった。
- 有機栽培において一番茶の時期は害虫の発生が少なく、秋番茶の時期は害虫の被害が増える前に天敵によって害虫が減ることがわかった。

## これからの活動ビジョン

- 欧米向け一番茶生産薬剤選択資料の作成では 7 年度までの 3 カ年の結果をまとめて一番茶前に使える農薬とその使用時期、使えない農薬を相手国別に整理して生産者への浸透を図る。
- 有機栽培茶の生産方式の検証では、データを積み重ね、年次変動を踏まえた事例情報として整理し、新たに有機栽培を開始する生産者の増加に結びつけるよう活用する。

## 活動体制

JA ならけん（営農指導）、山添村（村事業推進）、農業水産振興課（全体調整、県事業推進）  
大和茶研究センター（技術情報提供、指導、助言）、北部農業振興事務所（連携推進）

---

## 用語解説

### 農薬残留基準値

農産物などの食品に含まれていても安全とされる農薬の最大摂取濃度  
のことで、国によって異なる。

### 有機農業

化学的に合成された肥料、農薬を使用しないことなど、環境への影響をできるだけ低減した農業生産の方法を用いて行われる農業。